

文化財を訪ねて

—見てある記—

桶川の古墳

埼玉県さいたまの古墳というとな、多くの人は埼玉古墳群を思い浮かべると思いますが。埼玉県の県名発祥の地でもある行田市埼玉さいたまに造られた、東日本を代表する古墳群です。5世紀末から7世紀前半の時期にかけて、狭い範囲に二重の堀を持つ大形古墳が集中して造られているなどの特徴があり、国宝の稲荷山古墳いなごやま出土金錯銘鉄剣きんさくめいてつけんなど多くの遺物が出土しています。現在でも発掘調査や整備が続けられています。

埼玉古墳群から南に約18km、荒川左岸の小さな谷が入り組んだ桶川の台地上でも、6世紀後半から7世紀前半にかけて多くの古墳が造られました。

川田谷地区を中心に分布する川田谷古墳群には、4つの支群60基以上の古墳が存在したことが知られており、原山古墳群は桶川市の史跡に指定されています。また、川田谷古墳群の東の台地奥部にある、上日出谷の氷川神社裏古墳から出土した馬具なども、市の文化財に指定されているなど、埼玉古墳群と同じ時代には桶川でも多くの古墳が造られていました。

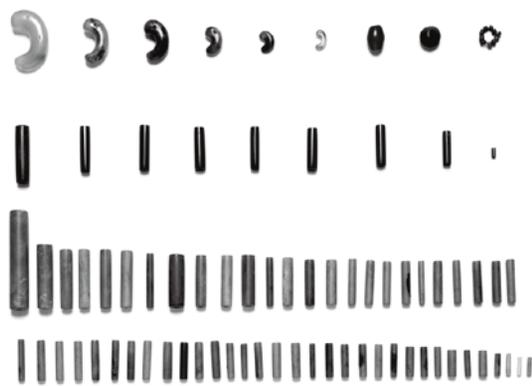
埼玉古墳群で最初に造られた稲荷山古墳より100年以上前の4世紀、川田谷古墳群の樋詰支群ひぎづみに相当する場所

埼玉県を代表する前期古墳が造られました。熊野神社古墳です。熊野神社古墳は、江川の浸食谷に面した直径約38mの円墳で、その名前のとおり墳丘に熊野神社が建てられており、古墳自体は埼玉県の史跡に指定されています。昭和3年、地元で「オクマンサマ」と呼ばれていた熊野神社の社殿を改築する際、現在の社殿周辺から粘土が固められた主体部（埋葬施設）と考えられる遺構が発見され、この中から玉類や石製品および朱の塊など多くの遺物が出土しました。この遺構は粘土槲くわと呼ばれる棺を納めた施設で、出土した遺物は被葬者と一緒に埋葬された副葬品であったと考えられます。



▲熊野神社古墳出土品

熊野神社古墳から出土した遺物は、硬玉製勾玉・瑪瑙製勾玉・碧玉製管玉・碧玉釧・碧玉巴形石製品・碧玉筒形石製品・瑠璃小玉や筒型銅製品などであり、昭和28年に一括して国の重要文化財に指定されています。これらの遺物は、玉杖の一部である筒形石製品や威儀具である巴形石製品など、権力の象徴ともいえる威信財いしんざいが中心であり、熊野神社古墳は4世紀の荒川下流域を治める大きな権力者の墓であったと考えられます。また、筒型銅製品などからは畿内勢力との結びつきが想定でき、荒川を通じた各地との交流を窺うことができる、重要な遺物といえるでしょう。



▲熊野神社古墳出土品